

上級日本語学習者の理解困難点に見られるテキスト解釈過程の研究

LD172004 藤原未雪

第一部 概要と調査方法

第1章 序論

本研究は、上級日本語学習者の理解困難点に見られるテキスト解釈過程について明らかにすることを目的とした。テキストまたは文章とは、2文以上からなり、それが文脈を持つことによって統合され、前後に文脈を持たず、それ自身全体をなしているもの(市川 1978)、全体で一つの意味的なまとまりをなす“coherence(結束性)”を持った話し言葉・書き言葉を含むすべての言語表現(Halliday & Hasan 1976)と定義されている。読みに関する研究は、教育学、認知心理学、言語学、応用言語学、外国語教育、情報処理など、様々な分野で研究対象となっている。本研究は第二言語習得の読解研究の分野に位置するものである。

テキストには様々なジャンルがあるが、テキスト理解は言語形式の読み取りであることを考えると、ジャンルが異なっても本質的には共通する部分も多いと考える。本研究では、まずは学術論文の読解過程を調査し、その理解困難点や語義の解釈過程を把握し、そこから発展させて小説のテキスト理解を調査するという手順をとった。

本研究で扱った課題は次のとおりである。

1. テキスト中の語義の解釈はどのようになされ、それがテキストや読み手の母語とどのような関係があるのか。(第7章, 第8章, 第10章, 第13章)
2. 小説テキストの読解で見られる誤読(読み誤り)にはどのようなものがあり、それがテキストや読み手の母語とどのような関係があるのか。(第10章, 第13章, 第14章)
3. 読み手特性と誤読の間に定量的に有意な関係が見られるか。(第12章, 第15章)
4. 上級日本語学習者と日本語母語話者の読解過程を比較すると、共通の特徴や学習者独自の特徴があるか。また、一般にうまく読める人と誤読する人の読み方に違いはあるか。(第16章)

第2章 文章理解

本章では、先行研究における文章理解の考え方を概観した後、本研究における文章理解の考え方を述べた。本研究で主に扱う文章理解はミクロな理解である。本研究でいうミクロな理解とは、語や文の意味の解釈、指示対象の特定といった言語形式の理解である。本研究でミクロな理解を扱う意義は、第二言語の読解教育支援に研究の知見を生かすため、学習者がテキストを読むときにどのような言語形式が理解困難になるか具体的なデータを収集するためである。また、調査方法の点からも、ミクロな理解を扱う意義が認められることについて述べた。さらに、読解における第二言語学習者の特徴を習得研究の点からまとめた。

### 第3章 語義の解釈と誤読に関する先行研究

文章理解で重要なのは、文章を構成する語の意味、つまり語義がわかることである。語義の解釈にはテキストの文脈や文法から妥当であると考えられる正しい解釈もあれば、そうではない誤った解釈、いわゆる誤読もある。本章では、まず第二言語習得研究の分野における語義の解釈についての先行研究を概観した。具体的には、未知語の意味推測に関する研究について述べた。次に、誤読に関する先行研究を、母語話者と第二言語学習者の場合に分けて述べた。

### 第4章 テキストのジャンル特性

テキストには様々なジャンルがある。ジャンルとは、簡単に言えば文章の種類や様式である。代表的なものとして、説明文や物語文がある。テキストのジャンルはテキスト理解に影響を及ぼすと考えられている。本章では、説明文と物語文をとりあげ、そのジャンル特性が読解にどのような影響を与えるか考察した。本研究で材料文として用いた学術論文は説明文に、また、短編小説は物語文というジャンルにそれぞれ対応する。学術論文と小説のテキスト特性を見ると、語彙、文形式、視点において両者は区別されることがわかる。

### 第5章 本研究で重要となる用語の定義

本章では、本格的な議論に入る前に、本研究で重要となるいくつかの用語の定義を明確にしておいた。「文章理解」「ミクロな理解」「正しい解釈」「誤読」などである。これにより本研究の立場も同時に明確になった。

### 第6章 研究方法

本章では、読み手の文章理解の過程を可視化するために本研究で採用した調査方法について述べる。本研究では、学習者がテキストを読んで理解した内容を収集するために発話思考法を基本とし、調査者からも質問を行う方法をとった。まず、発話思考法(think aloud method)の理論的枠組みについて紹介してから、本研究で採用した調査方法について説明し、その意義について述べた。

## 第二部 学術論文の読解に関する研究

### 第7章 学術論文の読解における名詞の誤った理解

本章では、中国語を母語とする上級日本語学習者が学術論文を読むときの読解過程を調査した。そこでの名詞の誤った理解に焦点をあて、論文読解時に生じる誤読について考察した。具体的には、外来語の多義語の問題に加え、固有名詞を普通名詞と取り違える誤読を指摘した。

### 第8章 1人の読みに注目した語義の解釈過程

本章では、1人の読解過程を時間の流れに沿って追跡し、中国語を母語とする上級日本語

学習者が学術論文を読むときの語義の解釈と修正過程を質的に明らかにした。そして、文脈に合った語義の解釈を困難にする要因として、語の意味的な特性や、専門知識という背景知識が影響したことを示した。

### 第三部 小説テキスト読解に関する研究

#### 第9章 材料文の分析

本章では、本研究で用いた材料文の分析について述べた。まず、材料文のテキストの基本情報について述べた。次に、英語・韓国語・中国語と日本語の談話構成について先行研究を概観した。さらに、英語・韓国語・中国語の翻訳テキストと日本語テキストを対照することにより学習者の母語別の読解上の困難点を予測した。その知見を調査デザインに反映させた。

#### 第10章 パイロット研究—中国人大学院生4人の調査—

本章では、第三部で論じる小説テキストの読解に関する研究の基礎となったパイロット研究について述べた。パイロット研究として、中国語母語話者4人に小説を読んで母語でその内容を語ってもらい、その読解過程を明らかにした。具体的には、小説テキストのどのような箇所が読解の困難点となり、また、どのような誤読が見られたかを明らかにした。このパイロット研究で得られた知見と9.3.で述べた英・韓・中の翻訳テキストの対照結果を参考にして、第11章以降で論じる研究において、テキストのどのような箇所で学習者に質問をするかを決めた。本章で得られた知見を調査デザインに反映させた。

#### 第11章 日本語母語話者の小説テキストの読解

本章では、日本語母語話者が小説を読んだときの読解について論じた。日本人大学生17人に小説を読んでもらいながら、語句や文の意味をどのように解釈し、その際にどのような手がかりを使ったかについて語ってもらう調査をした。その解釈について語用論から考察し、「筆者の意図」「テキスト」「読み手の解釈」の間に生じるズレに焦点をあてた。日本語母語話者であっても、筆者の意図と異なる解釈になるという「ぶれ」があり、そこにはテキストと人間理解の関係の限界性が示唆された。

#### 第12章 日本語学習者の小説テキストの読解

本章では、英語・韓国語・中国語母語話者それぞれ13人、合計39人を対象に行った小説テキストの読解の調査結果について、その全体像を簡潔に述べた。詳細については第13章以降で論じた。本章では、まず、協力者の基本データを示した後で、母語別に誤読の概要を示した。

#### 第13章 誤った語義の解釈と文脈との整合性

本章では、日本語学習者の読解で見られた誤読のうち、語義の解釈に焦点をあてた。具体的には、誤った語義の解釈と文脈との整合性について論じた。学習者は様々な要因から

誤った語義の解釈をした。漢字の字形認識の誤り，音韻情報の使用による誤り，語の構成要素の分析による誤り，多義的な表現の解釈における誤りである。これには母語別の特徴も見られた。誤った語義の解釈について，文脈との整合性を見てみると，ほとんどがすべての文脈，または部分的に文脈と整合性を持つことがわかった。

#### 第 14 章 登場人物を指示する要素の読み誤り

本章では，日本語学習者の文脈理解に焦点をあてた。具体的には，小説テキストの読解において文脈理解の指標となる登場人物を指示する要素について，日本語学習者が適切に理解しているかどうかを調査した。本章では文脈理解の指標として，文中に明示されている人称詞をはじめ，文中に非明示となっている発話主，ゼロ代名詞，ノ格名詞句を分析の対象とした。これらは結束性をもたらす言語形式である。母語別にみると，韓国語母語話者は英語母語話者や中国語母語話者に比べて，誤読が少ない傾向があったが，これは日本語と韓国語の言語の類似性が背景にあることが示唆された。

#### 第 15 章 定量的な分析

本章では，調査で得られたデータを定量的に分析した。母語別の誤読の特徴や，文法に関する誤読と語義に関する誤読，SPOT90 で測定された協力者の日本語能力との関係を見ていった。また，読書習慣や辞書使用の回数についても検討した。

#### 第 16 章 日本語学習者の動的な読解過程

本章では，学習者が小説を読んだときの動的な読解過程について述べた。読み手はテキストを 1 文ずつたどり読みをして，互いの意味を論理的に関係づけながら，整合性のある表象を構築することを目指している。しかし，文字が紙に書かれているという媒体上の制約から読み手は情報を線条にしか得られない。そのため，つくられた解釈は固定的なものではなく，テキストを読み進めるにつれて修正されるのは自然な現象である。また，テキストのある部分の解釈が困難であった場合には，その箇所解釈については一旦保留したまま先を読み進め，その後，再びその部分に戻ってきて当該箇所の解釈が決定されるようなこともある。さらに，ある文の解釈を誤ったことで，別の文の解釈も誤るような誤読の連鎖もある。このように解釈が確定する過程は，行きつ戻りつする動的なものである。本章では，この動的な営みに焦点をあてた。同時に，解釈の修正をもたらしたきっかけについても明らかにした。

#### 第 17 章 総合考察

本章では，本研究の総合的な考察を行った。本研究の結論，学習者の母語別に見た読解の特徴，本研究の意義，読解教育への示唆，残された課題について論じた。

総括として，以上の考察を通じて，第二言語読解における理解困難点や誤読について，なぜそれが起こるのか，それが起こるとどうなるのかについて明らかにした。読解過程は雑多なものであるが，どのように雑多であるのか，その中身をできるだけ記述した。17.2.

では、学習者の母語別に見た小説テキスト読解の特徴について論じた。そこから、学習者の母語別の誤読からみた読解教育について提案した。

本研究に残された課題は 2 つある。1 つは手法について、もう 1 つは調査デザインについてである。まず、手法において、読み手の解釈を捉えることの難しさがあげられる。本研究で用いた手法は、理解の質的なデータを得るために発話思考法をもとにしたインタビューや口頭翻訳であった。発話内容である言語情報から協力者の解釈を読み取っていくことになるが、そこには言語表現に内在する曖昧性や、語用論的な推測が介在し、判断が難しい場合もあった。もう 1 つは調査デザインである。調査で行う質問項目の設定である。質問は文法に関するものと、意味に関するものに大きく分けられる。文法に関する質問は、ゼロ代名詞や人称詞がテキスト中の何を指しているか確認するものである。質問項目の設定には事前に十分なテキスト分析が必要になる。研究開始当初にテキスト分析を行い、それを基にして質問項目を設定した。しかし、研究を進めるにつれて新たな知見が得られることで、それまで気が付かなかった分析の観点が現われ、より緻密で構成的に質問項目を設定できることがわかった。本研究の結論に影響を及ぼすとは考えられないが、緻密で構成的な質問項目で調査をすれば、より踏み込んだ議論ができたと考える。

#### 参考文献

市川孝(1978)『国語教育のための文章論概説』教育出版

Halliday, M.A.K. & R. Hasan (1976) *Cohesion in English*. Longman. 安藤貞雄ほか訳(1997)『テキストはどのように構成されるか—言語の結束性—』ひつじ書房